

16人の「輪」で「和」を伝えて

河野 彩音

〈応募した目的〉

高校3年の夏休みにイギリスに短期留学し、多国籍の方と話すことや文化について理解し合うことに面白さを感じ、いつか国際交流の事業に参加してみたいと思ったのが最初のきっかけである。大学3年次のイギリス留学を経て、さらに国際的な視野を広げるとともに、今度は日本に馴染みのない国で「多様なつながり」を感じたいと思い応募に至った。また、この事業に参加できれば、旅行や留学だけでは出会うことのできない人々や深い文化に触れ、個人では決して行くことのない国について身をもって学ぶことができると思ったことも動機の一つである。

〈日本文化紹介係として〉

係として、現地で日本文化を紹介するために準備したものは、盆踊り、きゃりーぱみゅぱみゅのダンス、リトアニア民謡「アンカノムーレイ」、日本の歌「上を向いて歩こう」、折り紙、お手玉、けん玉、ヨーヨー、茶道、少林寺拳法、書道、福笑い、日本の四季・お風呂の文化・和食についてパワーポイントで作成したプレゼンテーションである。これらを、1週間の事前研修で候補を挙げるところから始め、それぞれ役割分担し、盆踊りを含むダンスや歌に至っては練習もしなくてはならないという、非常に過密なスケジュールであった。

成田での出発前研修では、各自が事前に物品購入を始め、披露するための練習、英語での説明等しっかりと準備してきたこともあり、ようやく形にすることができた。こうして、団全員で決めたスローガンである、16人の「輪」ができあがり、現地で「和」を伝える準備が整った。

実際に滞在中に行った文化紹介は、計8回である。中でも強く印象に残っているのは、Klaipėda County Ieva Symonaityte Public Libraryで行った文化紹介である。ここでは、書道、折り紙、少林寺拳法、福笑い、お手玉を各団員が披露し、体験会を行い、リトアニア民謡を皆で歌った。このように16人全員が広い会場でそれぞれのことをやるのは、これが初めてだった。場所が図書館というだけあり、会場には小さな子供からお年寄りの方まで集まった。

私が担当した折り紙のブースでは、約10名の人々が集まった。そこで出会った大学生二人は日本文化に非常に興味を持っており、一人は日本語が堪能であったが、全てアニメで勉強したそうで、それには大変驚かされた。もう一人は「アラビア語」という私と共通の趣味があったため、この二人とはすぐに打ち解けることができた。年齢が近かったこともあり、折り紙のことだけではなく、リトアニアの学生生活など様々なことを話した。また、二人とは二日後の自由時間にも合流し、クライベダ中心部を一緒に観光した。



図書館での文化紹介

もう一人強く心に残っているのは、年配の女性の方である。この方が私にとって、図書館での最後のお客様だった。先ほどの大学生二人は英語が堪能だったため、コミュニケーションには問題なかったが、こちらの女性は英語の“YES”と“NO”も怪しいほどだった。当然、英語で用意した鶴の折り方の説明は使い物にならず、せっかくなってきた女性にどのように接したら良いか迷った。そんなときに役に立ったのが、頭の片隅に入れておいたリトアニア語である。私には幸いにも派遣前からリトアニア人の友人が数名いたため、日本を出る前に何度か彼女たちとスカイプをし、使えるようリトアニア語を聞いては暗記するように励んだ。そして、その女性と一緒に鶴を折り始め、私と同じように折れたら

英語の“YES”に当たる“TAIP”、上手に折れたり難しいところが折れたら“GREAT”に当たる“GERAY”を何度も何度も言った。すると、緊張していた女性にもしだいに笑みがこぼれはじめ、無事に鶴を完成させることができた。鶴の羽を広げると、女性は目を輝かせて何かを言っていた。おそらく、「美しい」や「すばらしい」のようなことを言っていたのだろうと思う。最後の最後まで、私たちは大学生と行ったようなコミュニケーションを図ることはできなかったが、女性は非常に嬉しかったようで、帰り際にはハグまでしてくれた。お互いに言葉が理解できなくても、笑顔と喜んでもらいたいという気持ちさえあれば、心は通じ合えるということが分かった瞬間だった。

〈カウナスでのホームステイ〉

リトアニアで過ごした16日間の中で最も印象に残ったことは、カウナスでのホームステイである。ホストファミリーは4人家族で、シスター二人とは私と年齢が近く英語も堪能だったため、すぐに打ち解けることができた。しかし、御両親は英語を全く話さない方だったので、距離ができてしまわないようにと、役に立ったのがリトアニア語である。「ありがとう」や「美味しい」をリトアニア語で御両親に直接言うことによって、大変喜んでいただけたと同時に日本語にも興味を示してくださったのは非常に嬉しかった。

印象深いホームステイの中でも一番強く心に残っているのが、親戚の方との出会いである。二日目に親戚の方を訪ねにカウナス郊外まで行くと、遠く離れた日本からのお客様ということで、たくさんのリトアニア料理で厚くもてなしていただいた。また、牧場を営んでいたため、牛や馬がいる大草原の中を「アンカノムーレイ」を歌いながらジープで駆け巡った。それはまるでサファリパークのようで、名古屋のビルに囲まれて育った私にとっては、全てが新鮮な体験だった。お土産にいただいた3kgの自家栽培のハチミツは、今は家の食卓にあり、ホームステイでの楽しい思い出を表す象徴になっている。

3日目には森林を2時間ほど散策し、人が歩けるよう配慮された1本の道以外は、全く手付かずの自然の森に、カウナスの人々が常に自然と融合した暮らしを送っているということ学んだ。家に戻ると、ホストファザーが庭でケチャップライスに親戚の牧場産のビーフが入った昼食を用意してくれていた。三日間を通して1回も外食がなく、家族の温かい手料理をいただけただけなのに非常に感謝している。

帰り際に鶴の折り紙を家族の人数分置いていくと、とても美しいと何度も羽を広げて喜んでいただいた。そして別れ際、ホストマザーは天使がなぞらえられた刺繍の

リネンの巾着袋とリトアニアのパウムクーヘン、シャコティスをお土産に持たせてくれ、涙、涙のお別れになった。ほとんどの時間をホストシスターと過ごしていたため、御両親と一緒に話す機会は少なかったが、それでもお仕事が忙しいなか手料理を振舞ってくださったり、家族のトヨタの車に対して、「トヨタは日本の車だから、乗っているときは日本にいるみたいに感じてね」と言ってくださったり、冷蔵庫に杉原千畝のマグネットが貼ってあったりと、その心配り、温かさに最後の最後まで胸が熱くなった。英語が母語ではない国でのホームステイは初めてだったが、心を通わせ合うには言葉だけではなく、お互いを理解する心を持つことが大切だということ学んだ。今までの人生で1番濃かった三日間だった。



3日間お世話になったホストファミリー

〈国際青年交流会議〉

約3週間の活動を終え帰国すると、三日間の国際青年交流会議が待っていた。リトアニアで1日1日を全力で楽しんで来たために、正直なところ体力の限界が近づいていた。それは私だけではなく、他の日本団員も同じ状態だっただろう。国際青年交流会議では、ドミニカ共和国、ラオス、リトアニアと日本団員が派遣された国の他に、オーストリア、バーレーン、パプアニューギニアの3か国の外国招へい青年たちが集まり、日本も含め計7か国の団員と三日間を共にした。配属されたのは文化コースで期間中のルールは、(1)BE PUNCTUAL, (2)ACTIVE PARTICIPATION, (3) RESPECT EACH OTHER の三つである。後にこれが私たちの合言葉となっていった。

日程表を見ると、二日目の「裏千家」でのアクティビティ以外は全てディスカッション・プログラムで構成されていたため、6か国から集まった団員たちを前にして、何を話すことができるのだろうかかと不安で仕方なかった。しかし、実際に参加してみるとディスカッション・プログラムは、堅苦しいものではなく、コーディネーター

の方により非常に楽しいものに工夫がされていた。ディスカッションとはいえども、少人数のグループになって意見を言いやすい雰囲気にしたたり、ただ意見を交換するのではなく、模造紙に絵を交えながら書いてコミュニケーションを図った。模造紙に意見をまとめる作業だけでも、グループごとにカラーが異なり、絵なども日本人が描く絵とパプアニューギニア人が描く絵とは全く違う。元からディスカッションは大の苦手、普段は静かにしていることが多いが、このようなことを比較することの面白さに気付いた。

二日目は、「裏千家」で日本の大切な文化の一つである茶道を皆で体験した。日本人でありながらも、私にとってこの本格的な茶道体験は人生初めてだったので、学ぶことが大変多かった。お茶の入れ方はもちろん、入室から退室するまでの礼儀作法、そして「茶道」を「ちゃどう」と読むことすら知らなかった。皆で足のしびれに耐えながらも、お抹茶とお茶菓子をいただき、そして実際に体験したことによって、海外の派遣団員だけではなく、日本人の私たちにとっても日本文化に真摯に向き合えた貴重な時間だった。

その日の夜に行われた文化交流パーティーは、三日間の中で最も楽しく印象的だった。7か国それぞれがブースを出し、各国のお菓子や文化について紹介した。中でもパレーンのブースでは、伝統衣装であるアバヤが着られるだけでなく、アラブ圏で女性のファッションや魔除けとして有名なヘナの体験を行っていた。高校生の時にアラブの世界に興味を持って以来、ヘナはずっと憧れだったので、左腕全体に大きなヘナを入れてもらった。ヘナを入れ、友人にアバヤを着せてもらおうと、ビデオを構え「カメラに向かってなんか言って！」と言うので、アラビア語で自己紹介をすると、笑いながらも喜んでくれた。結局ヘナは五日ほどで消えてしまったが、今でも左腕を見ると、あのときの思い出が蘇る。



文化交流パーティーにて

最終日の三日目は、ホテルニューオータニに移動後、環境、教育、文化の3コースを交えて成果発表会を行った。成果発表会では全員が壇上に上がる訳ではなく人数が限られている。私は二日間の反省も踏まえて発表者に立候補し、大勢の前で発表することになった。このような場所で英語で発表するのは全くの初めてだったため、緊張と焦りが生じたが、私にとっては大きな挑戦でもあった。発表が無事に終わると、それまでずっと支えてくれたリトアニア人の団員から労いの言葉をかけてもらい、頑張った証にと絵の得意な団員が似顔絵を描いてくれた。この似顔絵が今回の派遣で1番のお土産になった。文化コースのプログラムも終わりに近づくと、一人一人が感想を述べ始め、しみみりとした空気に包まれた。私が感謝の気持ち「ありがとう」を7か国語で述べると、それぞれの国の団員が非常に喜んでくれ、私にとっても多くの言語で感謝の気持ちが述べられるようになったことは大きな収穫だった。

皇太子殿下御臨席のレセプションが終わると、三日間過ごした文化コースの仲間を始め、全ての外国招へい青年たちに別れを伝える時間になった。特にリトアニアに滞在していた時からずっと一緒だったリトアニア招へい青年との別れは非常に名残惜しいものだった。お互いに再会の約束をし、日本での旅の幸運を祈るとともに別れると、なんとも言えない気持ちが込み上げた。



10人のリトアニア青年

〈人の温かさに触れて〉

今回、この事業を通して一番学んだこと、実感したことは「人の温かさ」である。この事業に参加するときには、初めて出会った人たちと共に約1か月を過ごすなど想像がつかなかった。幸運にも、団長、副団長そして13人の素晴らしい団員に恵まれ、素晴らしい経験ができた。もし、このメンバーではなかったら、途中で挫折をしていたかもしれない。そして、リトアニアで出会った人々。初めは、アジア人がまだ珍しい国ということもあり、多少の偏見を恐れ

ていたが、滞在中に嫌な思いをしたことは1度もなかった。それどころか、日本に留学していたリトアニア人が街中で声をかけてくれたり、年配の男性が一生懸命に身振り手振りで道を教えてくださったり、特にホームステイでは見ず知らずの日本人の私を心から歓迎してくれた。リトアニア人の心の温かさを存分に感じる事ができたからこそ、良い思い出を作ることができたのかもしれない。今回の派遣で出会った全ての人は宝物であり、また全ての経験がこれからの将来においての重要な糧となるだろう。このような、素晴らしい事業に参加できたことに感謝するとともに、派遣に携わってくださった全ての方にお礼を申し上げたい。

私は将来、外資系の航空会社で客室乗務員として働くことが夢である。海外ベースの航空会社に勤めるとなれば、乗務員もお客様も多国籍で、それぞれの国や文化背景に瞬時に対応できる柔軟性が必要とされるだろう。そのような状況の中で、日本人であることを忘れずに、「おもてなし」の心を世界中の人に伝えていき、笑顔にしたい。そして、リトアニアで感じ取った「人の温かさ」を、今後は私がリトアニアだけではなく、世界中の人に感じ取っていただけるように励みたい。